

天遊 Ten You

大阪教育大学広報誌

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

2020 特別号

天遊 祝50号

Athlete's View

TOPICS

附属学校園ウォッチ

特集
1

学長対談「Society 5.0 時代に対応した教員養成」

特集
2

教育コラボレーション演習

大教大
NAVI



アプリを利用すれば、今号の「天遊」に関連した動画が視聴できます。

「大教大NAVI」アプリをダウンロードして、左記のアイコンと同じボタンをアプリ内でタップするとカメラ画面に切り替わります。次に左記のアイコンをカメラに読み込めると、動画が視聴できます。

詳しいアプリの使い方はホームページをご参照ください。



国立大学法人
大阪教育大学

SPECIAL TALK

Sumio Kuribayashi

Atsushi Nakano



学長対談

Society 5.0 時代に対応した教員養成 ～大阪から日本の教育を変える～

株式会社日経BP
PCメディア編集部長
教育とICT Online 編集長
なかの あつし
中野 淳

放送局の報道記者、電機メーカーのエンジニアを経て、1997年から日経BP。日経パソコン記者、同誌編集長、日経BPイノベーションICT研究所上席研究員、コンピュータ・ネットワーク局教育事業部長などを経て現職。昭和39年生まれ、55歳。

AI、ビッグデータ、IOTといった情報技術の急速な発展に伴う社会構造の大きな変化の中で、教師に求められる役割や能力も変わっていきます。

これからの時代に対応した教員養成系大学の在り方について、大阪教育大学栗林学長と日経BPの中野編集長が対談しました。

大阪教育大学学長
くりばやし すみお
栗林 澄夫

富山大学文理学部卒、
大阪大学大学院文学研究科
修士課程修了、文学修士。
大阪教育大学理事・
副学長を経て現職。
昭和23年生まれ、71歳。

なことは意味があると思いますが、ふと、映画「2001年宇宙の旅」の中で、ハルというコンピュータが、人間の判断や指示に反するという場面が思い出されます。あの時代からすでに未来に対する警告の意味を示していたのではと考えるのですが、こういうネガティブな側面に関わって教育の中で何か対応を図っていくべき部分はありませんか？

【中野】

学長がご指摘されたように、社会でのAI活用には負の側面があります。一つは、AIによる「判断の自身」がブラックボックスになりがちだという点です。犬と猫を判別するAIを育てることは簡単ですが、そのAIが内部でどのようにその判断をしているかは通常は分かりません。将来的に、人よりも精度の高い判断ができるAIはどんどん生まれてくるでしょう。例えば、「手術をすべきかどうか」「どの薬を使うべきか」という判断をAIに委ねてよいのかは、社会の中で議論が必要でしょう。

AIが人間の知性を超えて自律的に進化する「シンギュラリティ」と呼ばれる概念も話題になっています。こうした事象が発生する可能性や、発生する場合の時期については、専門家でも意見は分かれています。AIに関する教育では、こうした点についても取り扱い、生徒や学生が議論できるようにすべきだと思います。

教育改革と教育情報化の重要性について

【栗林】

学習指導要領の改訂、高大接続改革及び大学改革など10年後、20年後の未来を見据えた教育改革が進む中、学校や大学における教育情報化の重要性がさらに増えています。特に、学習指導要領の中で「情報活用能力」が学習の基盤となる資質・能力の一つとされ、各教科等の特質を生かしつつ、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることと明記されたことはとても重要なことだと考えています。小学校ではプログラミング教育が必修化され高校でもプログラミングやネットワークの仕組みなどを学ぶ「情報」が必修化されますが、大阪教育大学でもICT基礎a・bなどの科目を設け、情報教育を重視しているところです。編集長として全国にわたって調査や取材をされる機会が多いと思いますが、教育情報化の重要性についてどのようにお考えでしょうか。

【中野】

記者として20年以上、ICT活用教育の現場を取材してきました。その中でここ数年、ICT活用教育が大きく広がっていくのを感じています。ICTは、あくまでも教育のための「道具」ですが、先生方がうまく活用すれば、より質の高い授業、より分かりやすい授業を実現できます。また、教職員の校務の負担を低減して、子どもと向き

合う時間を確保する上でもICTの活用は役に立ちます。

新しい学習指導要領がうたっているように、これからの社会に必要な「情報活用能力」を子どもたちが身に付けることが、教育現場で大切なポイントになります。AI（人工知能）などの新しい技術によって、今後社会はどんどん変わっていくでしょう。今後は、こうした変化を把握して、教育カリキュラムに反映することが、より重要になるのではないのでしょうか。

【栗林】

本学の附属学校でも統合型校務支援システムの導入をはじめ、教員の仕事を合理化するための取り組みを進めているところであります。同時にAIによって変わっていく社会に対する学びの必要性ということになりましたが、子どもたちが学ぶだけではなくてそうした知見を持った人間が新しい世の中を作っていくのだという観点で、本年度の補正予算で「GIGAスクール構想」が予算化されるなど国を挙げて教育の情報化を推進しているわけですが、この点についてはどのようにお考えでしょうか。

【中野】

GIGAスクール構想は、学習の基盤になるICT環境を整備する上で非常に有効な取り組みだと思います。機器の整備と合わせて、それを先生方が使いこなすための知識やノウハウを身に付けることが重要なポイントです。

AIに関しては、高等学校や大学などで

誰もが学ぶようにしようという方針を国が打ち出しています。この際に難しいのは、「AIとは何で、教育現場では何を扱えばよいのか」という理解や議論が十分に進んでいない点です。私自身も、生徒や学生がAIについて実習型の授業を体験して、社会の課題をAIで解決するアイデアを議論できるようにするというのが、目標の1つだと考えています。

2019年には実際に、いくつかの大学や附属中学校で、画像の機械学習ツールを使ってAIについて学ぶ体験型の授業を担当しました。附属中学校では、教室内で生徒が写真を撮って、その場で画像を判定するAIを育ててみました。こうした体験をすると、生徒や学生から、いろいろな課題をAIで解決するアイデアが出てきます。AIについて簡単に説明してこうした実習を行う程度なら、1〜2時間の授業時間でも実現できます。

大学の場合は、こうした体験の上に、AIのツールを組み込んだプログラミングを自分で作成したり、大量のデータを分析してみたりする授業カリキュラムを体系的に整備するのが理想です。

【栗林】

今ご指摘いただいたのは、AIのその識別力や認識力などを利用することによって人間の判断力をサポートできる、あるいはその長時間の作業を圧縮できるというような、積極的な意味で使えることをこれから学習のプロセスの中に入れていくべきだと思います。そういうポジティブ

大阪教育大学に期待すること

【栗林】

今、国立の教員養成系大学をめぐるのは、附属学校園を含め、どう改革していくのか、Society5.0に対応した教員養成を先導する大学が必要であるということが教育再生実行会議で提唱され、教員養成におけるフラッグシップ大学の募集が行われようとしています。本学としては、当然そうしたモデル的な大学となることをめざしているところですが、中野さんは本学の附属中学校出身者として教育実習生による授業も体験しておられます。今後、本学が教員養成大学としてどのような改革をするべきかお気づきの点などありましたら教えてください。

【中野】

附属中学校時代のことを振り返ると、先生方が非常に意欲的で沢山の面白い授業をしていただいたなと思います。教育実習の先生方がたくさん来ていろいろな授業があつて本当に楽しかったです。いろいろな先生が、新しいことをどんどん試してみる。それが附属学校としての役割の一つですし、生徒たちもそれを楽しんでいるという、そういう土壌があるというのは大きな財産だと思います。

ICTなどによって、社会の変化が加速しています。これからの教育現場は、こうした社会の中で活躍できる子どもを育てることがとても大切になっていきます。そのためには、教員養成系大学が社会と教育現



場を結ぶハブになる必要があるのではないのでしょうか。世の中の新しい動きをきちんと把握して、教育委員会や学校と連携して教育に反映するといったイメージです。その際には、まずは教員養成系大学と附属学校が一体となつて実践的な取組を進め、そこで得られた知見を広く学校や教育関係者に広げることが重要だと思います。

大阪教育大学の強みの一つは、地域の大阪府や大阪市とのつながりの強さやフットワークの軽さだと感じています。こうした点は、フラッグシップ大学としての活動にもつながるでしょう。

【栗林】

おっしゃる通りで、そもそもなぜ教員養成系大学には附属学校の設置を義務付けら

【中野】

先ほどお話ししたように、大学での研究成果が教育現場に十分に伝わっていないのが、全国の教員養成系大学の実情です。大学と附属学校で実践したさまざまな取り組みの成果を、教育委員会と連携して学校や教員に伝えていくことが大切です。また、教育現場のさまざまな生の情報を把握できれば、大学での研究や附属学校での実践的な授業の質も向上するでしょう。

学長に紹介いただいた計画が実現すると、こうしたサイクルを整えられるのではないのでしょうか。ぜひ、実現していただければと思います。

教員をめざす人へのメッセージ

【栗林】

最後になりましたが日本あるいは世界の子どもたちのために教員をめざす高校生・大学生に向けてメッセージをいただければと思います。よろしく願いいたします。

【中野】

月並みな意見ですが、高校生や大学生の間に、今まで経験していない「社会」を少しでも多く、経験してほしいと思います。企業の現場を知ったり、海外の文化を知ったりすることも有意義でしょう。カリキュラムや制度を整えるなどして、こうした経験を後押しできる教育の場になると素晴らしいと思います。あと一つ、世の中は驚くほ

れているのかというと、教員養成のための教育研究を大学と附属が一緒になって行うことと、それが大学の教員養成のために役に立つということが大きな役割の一つです。

もう一つは教育実習をしつかり行つて、実践力のある教員を育成していくということで、これまでも附属学校がしっかりと果たしてきたところのものです。中野さんをはじめ卒業生の方から常に評価いただけているのは、本学附属学校園が先駆的な授業を実施してきた証ではないかと自負しています。

さて、いわゆるSociety5.0といわれている社会の中で、どういう生活ができるのかということを見据えながら教育に取り組んでいきたいと思います。中野さんをはじめをどこまで担えるかがフラッグシップ大学の役割として果たすべき指標になると思っています。そうすると未来に向かった教育で大きな役割を果たすのがやはり情報教育。子どもたちが全員端末を持って、クラウドを通じて学習するという教育が実現すれば、何も学校だけに閉じて活用するわけではなく、スマートフォンを持ち歩くのと同じようにどこにいても学習の機会に結び付けていくという試みを進めていくことが重要だと考えています。先ほどのコンピュータの活用の延長上として、今後どのように学校で取り組みを進めていったら良いのかというアドバイスもいただけたらありがたいです。

【中野】

ICTを活用した効果的な教育を実現したり、児童や生徒が適切なICTリテラ

どの速さで変わっていくということも、経験の中で実感してほしいです。今の世の中の仕組みがずっと続くわけではないと実感することは、自分の将来について考える際に役立つはずです。

今日、こうした機会をいただけて、最後に学長に伺つてみたいことがあります。教員採用の人数は時代によって大きな波があります。大学卒業時に採用枠が少なかった世代には、優秀だったのに希望する教員になれなかったという人がたくさんいます。教員採用の枠が広がった時に、こういう人がそれまでの社会経験を生かして、教育現場に入る仕組みを作ることはできないものでしょうか。現実には難しい点も多くあるでしょうが、こうした人が増えれば、社会と教育現場との連携も進めやすくなると思います。

【栗林】

私は教員免許の国家資格化を文部科学省でも強く主張しており、教育大学協会でのワーキングでも検討されていて近々報告書が提出されることになっています。今後人口減が進む日本において必要になるより丁寧な教育、つまり教育の高度化は国の基本方針なので、教員免許の国家資格化は必要なことと考えるわけです。

一方で本学は特別免許状取得の推進をめざした働きかけも行っています。教員免許を持たない人でも一定の教科や必要性に応じて柔軟に特別免許を出せるような仕組みです。中野さんがおっしゃる通り、今必要とされる学校と社会をつなげる学びの部分

シーを身に付けたりするには、校内ネットワークや一人一台の学習用端末の整備は必須です。

私は、全国の全ての市区町村について、教育情報化の進展度を比較する「公立学校情報化ランキング」調査を10年以上続けています。この調査から、ICT環境やICTに関する教員の指導力には、驚くほどの地域差があることが明らかになっています。教育の機会均等」という大原則が、教育の情報化については崩れているわけです。

国の補助金によって校内ネットワークの整備と小中学校での1人1台を実現しようという「GIGAスクール構想」は、ICT環境整備を進め、地域格差を解消する追い風になります。ただ、これだけでは不十分です。整ったICT環境を利用して効果的な教育を実現するための教員のスキル向上や、教育の情報化のノウハウを広げる地域連携の推進なども、併せて進めていく必要があります。

【栗林】

本学がめざすフラッグシップ大学の形は、大きな企業と直接的な形で結びついてそして学校教育の高度化を図っていくということではなくて、むしろ地方に波及していけるモデル、つまり教育委員会との連携を非常に密接に行っていくこととしています。大阪教育大学天王寺キャンパスの敷地内に大阪市の教育センターを設置する計画は、1月31日に大阪市との間で基本協定を締結しました。これまでも包括的な連携協定は結んで協力はしていますが今後はもっと密接に、大

を担い、学校現場で不足する部分を補うなど今の学校での課題のいくつかを解決に結びつけることができる重要なポイントだと思っています。

【中野】

企業での勤務を経験してから教員になったり、教員が途中で何年間か企業で働いたりといった形が広がると、企業と教育現場の双方にメリットが生まれるのではないのでしょうか。

【栗林】

私もそうだと思っています。多様な要素に満ちている組織というのは強いですから。最後にいいご意見をいただいたと思っています。今後も一層これらの取り組みを進めていけたらと思っています。本日はどうもありがとうございました。





TenYou

大阪教育大学広報誌
OSAKA KYOIKU UNIVERSITY PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

祝50号

大阪教育大学広報誌「天遊」は記念すべき50号を迎えました。2004年4月から大学のホットなニュースや、授業や先生の紹介、学生たちの活躍の様子をはじめ、附属学校園の紹介など、多くの情報を発信してきました。



過去の特集をピックアップでご紹介

- Vol. 01 (2004年04月発行)
平成16年 国立大学法人大阪教育大学の発足にあたって
- Vol. 02 (2004年10月発行)
今教師が旬 ― 先生が足りない ―
- Vol. 05 (2006年03月発行)
大学で学ぶ社会人 天王寺キャンパス
- Vol. 10 (2008年10月発行)
教育職員免許状更新講習への取り組み
- Vol. 11 (2009年03月発行)
開学60周年記念に寄せて 長尾彰夫学長
- Vol. 29 (2014年04月発行)
新学長挨拶 グローバル化に対応した大学をめざして 栗林澄夫学長
- Vol. 33 (2015年03月発行)
学長対談 今後の教員養成の在り方と大阪教育大学の使命
- Vol. 35 (2015年11月発行)
地域力を結集した安全教育新基軸セーフティプロモーションスクール (SPS)
- Vol. 36 (2016年01月発行)
高等学校と連携し次代を担う教師を育てる「府立高校教職コンソーシアム」
- Vol. 41 (2017年03月発行)
学長対談 日本の未来をつくる 大阪府・大阪市・堺市教育長
- Vol. 46 (2018年12月発行)
教職を知る、子どもと関わる 学校インターンシップ
- Vol. 49 (2019年12月発行)
大阪の教育力を結集し次世代教員リーダーを養成する 連合教職大学院

記念すべき天遊 50号。過去の表紙を揃えてみると、その時々の特徴が表れていて本学の歴史をよく知ることができます。

「天遊」は、先生の言葉から引用されたもので、「調理場にはいくつもの入口が備わって空間的なゆとりがあるように、人の心にもゆとりとした空間がある。心にゆとりとした空間がなければ、6種の感覚器官は混乱に陥ってしまうだろう。」と、人間の心の中に自然に備わっている余裕の大切さをあらわしているように思われます。

18歳人口が減少する中、変化の激しい社会に対応しなければならぬ時代だからこそ「教育」が重要になると考えています。このため、教員養成の在り方自体を変革していくことが国から強く求められており、本学としても、ガバナンスの強化、組織体制の見直しなど大きな改革に着手しているところです。このような大きな改革を成功させるためには、時代の変化や社会からの要請を踏まえることももちろんですが、教職員一人ひとりが心に余裕をもって広い視野で日々の業務に携わることが大切だと思います。これからも天遊の精神を大切にして、日本の教育を更に発展させていきたいと思います。



理事・事務局長
新津 勝二 (広報担当)

お知らせ

大阪教育大学広報誌
天遊(TenYou)は
大学ホームページから
ご覧いただく形に変わります

大阪教育大学広報誌「天遊」(TenYou)は今号をもって紙媒体での冊子送付を終了し、大学ホームページから動画なども含めパソコンやスマホでいつでもご覧いただける形に変わります。

各号の発行毎のお知らせメールをご希望の方はアドレス登録をお願いします。発行は、大学ホームページ新着情報や公式フェイスブックなどでもお知らせします。

メールアドレス登録はこちらから→

大阪教育大学 天遊

<https://osaka-kyoiku.ac.jp/university/kikaku/relation/tenyu.html>



公式SNS アカウント名: OsakaKyoikuUniv



今後も大阪教育大学広報誌「天遊」(TenYou)を
よろしくお願いします!

教育コラボレーション演習とは

1

受入先区分	学校	社会教育施設	外国人学習支援	社会福祉関連	子育て支援	子ども食堂	体験学習	スポーツ関連	文化活動関連	合計
	幼・小・中・高・専門学校など	図書館・博物館など	識字・日本語学校など	社会福祉法人などが主催する事業	就学前教育・保育施設など		ビッグバン、少年自然の家など	柔道・剣道連盟、セレッソ大阪など	地域の芸術祭、ピッコロシアターなど	
個所数	16	8	4	6	3	23	11	7	5	60
人数	84	40	9	43	24	37	36	45	17	335
割合(%)	25	12	3	13	7	11	11	13	5	100

(2019年度実績)

受入先

学校、公的機関、博物館や資料館、CSR(社会貢献)に取り組む企業やNPO法人

地域の子どもたちへの教育や生活を直接的・間接的に支えているさまざまな現場に本学の学生が赴き年間30時間の社会貢献学習(サービスマーケティング)を実施。この活動を通じ、学校と協働しながら子どもたちの健やかな成長をサポートするスキルを身につけ、社会の様々な場面でキーマンとなって広く教育を支援していくような人材の育成をめざします。

目的

対象と期間

※活動により例外あり

- 教育協働学科3回生の必修科目(2単位)
- 活動は2回生の2月から3回生の1月の期間中、30時間以上
- 3期募集
 - 第1期…2～5月
 - 第2期…6～9月
 - 第3期…10～1月

活動型

- 短期集中型
夏季・冬季休暇または土・日・祝日等を活用して集中的に活動
- 長期継続型
特定の曜日に継続した活動

Point!

部活動や生活、学修計画に応じて選べるようになっています。

演習の流れ

2

活動前

- 「事前指導1」受講
- 演習先選択(Moodle登録)
- 「事前指導2」受講
- 受入先訪問・面談
- 「個人票」と「誓約書」提出
- 受入先、活動時期、活動内容報告

活動中

- 活動初日「誓約書」を受入先へ提出
- 活動日々「活動日誌」活動記録

活動終了後

- 「演習後アンケート」回答
- 活動終了報告
- 事後指導・振り返り「活動日誌」「出席表」「活動日誌」の提出

学生

指導教員 受入先担当教職員 教育実践支援ルーム

事前指導では、目標設定のほか、個人情報取り扱いや守秘義務、心得やマナーなどについて指導。活動中は、定期的な状況報告に対して必要に応じた支援や指導。終了後は事後指導や活動の振り返りを行うなど活動開始から終了まで随時サポートします。

Point!

目標を定めて臨むことで活動を自立的に進め、事後の振り返りでは活動を客観視することがポイントです。

特集

教育コラボレーション演習

～地域と協働し、多様な教育課題を解決する人材へ～

教育協働学科は、総合的な教養に加え、教育マインドと専門性の高い能力を身につけ、学校を取り巻く地域や社会を含む「チーム学校」の中心メンバーとなる人材を育成。教育的な視点から学校・家庭・地域・社会と連携協働し、多様な教育課題の解決を図れるような人材の育成をめざします。「教育コラボレーション演習」は学生が学校や地域と協働(コラボレーション)して子どもを育む社会づくりや在学中から取り組む、大阪教育大学教育協働学科ならではの授業です。



【教育協働学科がめざす人材育成】

専門的知識・技能

所属する専攻・コースの分野に係る専門的知識・技能を備え、専門分野に関する内容やその意義を社会に向けて的確に伝達・表現することが出来る能力を有し、主体的に物事を考え、専門的知識・技能を活用した行動ができる。

協働力

社会のグローバル化に対応し、学校や地域等と連携の上、協働して課題解決にあたる。他者と協働して問題を分析のうえ整理し、課題解決に向けてのプランを策定することができる能力や、課題解決プランを他者と協働して実行するための実践力を持つ。

多様性理解

歴史・文化・ジェンダー・年齢・価値観等の多様性を理解・尊重し、異文化・多文化を受容できる寛容な態度を身に付ける。グローバル時代における多様な課題を解決するために能動的に行動ができる。



イラスト協力：大阪教育大学大学院 芸術文化専攻 鈴木 なるみ

学生の声

5

- ①この演習先を選んだ理由は？ ②具体的な活動内容(箇条書きでも可)と印象的だった活動は？ ③演習前と演習後の違いは？
④あなたにとってコラボレーション演習とは？ ⑤あなたにとって教育協働とは？ ⑥卒業後の進路について(この学びをどのような形で生かしたいか)



演習先 海士町教育委員会
(2019年9月9日(月)～9月20日(金)2週間)
理数情報専攻3回生

柏谷直子さん

①行って良かったと思えるし、この実習を通して、みようという前向きな気持ちを養うことができました。
②率直にいうと、「行くだけで終わらせる」ことも出来ませんが、「人生に影響を与えるほどの経験」もできます。自分にとってどのようなものにするかは、本人の心持ち次第だと思います。
③「やりたいと思う人が行動する」ことで成り立つものだと思っています。やる気のある人だけで行えばいいという意味ではなく、教育協働に携わる人が皆前向きに行動するという意味で、もしも、そういう思いを共有できなかったり無理をしている人がいると、うまく協働できないと思います。
④企業就職をめざす予定です。教育に関わるものを扱う職業に就きたいと思っています。今回の実習では自分から動き、人と関わってよい人間関係を築こうとするこの大切さを実感しました。「やらずに後悔するのやらやって後悔しよう」という精神と合わせて社会へ出てからも意識していきたいと思っています。



①せっかく行くのなら誰よりも思い出に残るような教育コラボレーション演習にしたい。より珍しい経験をしたいという思いから、少し遠いですが、島根県隠岐郡の海士町教育委員会を選びました。
②基本毎日、9時から17時までは教育機関で活動を行いました。(私自身は保育園)17時以降は、教育機関、教育と地域、地域という違う分野で活動するメンバーでグループを作り、日々活動の情報交換をしつつ「海士町の町づくり活性化計画」に取組み、最終日に発表を行いました。
③演習前は、長期間の実習に少し不安を感じました。演習の最初の頃も、慣れない生活で体がついてきてくれなくて少ししんどいこともありました。しかし、後半になると、実習メンバーとも絆ができ、毎日楽しくなりました。演習後は、間違いなく海士町



演習先 YMC Aサポートクラス
(2019年5月～10月 週一回15日間)
教育心理学専攻3回生

早川実桜さん

①発達障がいや学習障がいに興味があり、支援について知りたかったので、専門的資格を持つ方々から直接学ぶ機会は貴重だと思ったからです。大学で多くの支援について学ぶ中で、支援が実践されている場での実践的な学びの必要性を感じていました。
②主に学習障がいを持つ児童への授業(授業は講師の方が行う)や課題に対して、児童らの回答、反応及び発言の記録などのサポートを行いました。ひらがなを書くのが苦手な子とかかわりや、ひらがなを探す課題(注意力を高めるトレーニング)など、学校教育では行われないようなワークを通して授業が展開されていたことが印象的でした。
③学習障がいを持つ児童への支援について具体的に知ることができました。表面上では気づかない障がいであり、一言に学習障がいといっても苦手なことや課題は多く、さまざま。それぞれに合った適切な支援を行う必要性があり、学校教育だけではそれぞれの課題に向き合えず、問題が解決されないのではないかと思います。
④現場で学べる貴重な機会です。専門的な知識を持ち実際の活動を行っている人やそれに関わる人から学ぶことができるため、学びたい分野に関してより深く多くの学びを得ることができたのです。
⑤今回の実習先で言うと、それぞれの分野で専門的な知識を持つ専門家が、支援をより充実させるのに不可欠なものだと思います。多くの専門家が互いに相手を尊重し、同じ目標に向かって上手く協働することができれば、障がいや家庭環境、いじめや貧困など、教育現場において問題視されている多くの問題を解決に近づけられると考えます。
⑥心理系の大学院に進み、専門的な心理的支援について研究したいと思っています。演習での学びは、心理支援職や子どもと関わりを持つ職場で働く際、必要な支援の提案などに活かしたいです。また、心理職として自分自身が働く環境においても、協働の姿勢で専門家をつなぐ存在になりたいです。

コーディネータよりメッセージ

3



教育実践支援ルーム
教育協働コーディネーター
吉原 孝 先生

「AIによって将来なくなる職業がでてくる」とか「子どもたちの育成にはICTの整備は急務だ」などと言われる中で進められている教育改革は大きな注目を浴びていますが、それぞれの学校現場では不登校や深刻ないじめが、地域では社会的孤立の深刻化が引き続き大きな社会問題として存在します。
これらの問題の解決には、情報通信技術の進展とそれに伴う学校教育だけではなく、家庭の養育機能や地域コミュニティ機能の低下が大きく関わっています。だからこそ、学校と家庭と地域が協働して子どもたちの教育に関わっていくことが必要なのです。
教師を志す学生のみならず、家族や地域の構成員としても、あらゆる場面で人と人とのつながりを大切に、競争ではなく協働しながら学び続けることが重要です。
とりわけ、本学の教育協働学科の皆さんたちには、教育コラボレーション演習の活動を通して、他者と協働しながら子どもたちの健やかな成長をサポートするスキルを身につけるとともに、より広い視野で社会をとらえ、様々な場面で教育協働のキーマンとなり、広い意味での教育を支援していくような力を身につける必要があります。ぜひ低学年のうちからコラボレーション演習について意識してもらいたいと思います。
教育実践支援ルームに気軽に立ち寄ってください。

活動内容抜粋(学校関連)

4

附属天王寺小学校

担任に付いて学習支援

- 各学年に2人ずつ、1週目1組、2週目2組、3週目3組の担任の先生に付いて学習支援
- 朝(8時15分～8時45分)、天王寺駅から学校までの登校通路に立ち、児童の安全確認を行う
- 昼休み(13時～14時)の掃除指導と遊び(安全対策のため)
- 放課後(15時50分～16時20分)の運動場での遊び(安全対策のため)
- 理科や図工の授業の道具の準備・片づけ
- 朝、金管バンド指導の補助
- 算数ドリルなどの丸付け
- 2019年2月下旬～3月中旬の3週間
- 1日あたり10人(6、7時間程度)
- 1人6時間×5日で30時間
- 学生は計30人

大阪市立桃陽小学校

教育支援、下校指導

- 2日間(10時間)
- 家庭キャンプ(青少年指導員主催)の実施補助
- 2日間(20時間)
- 受入学生は6人

大阪府立八尾翠翔高校

ピアノ指導

- 8月中、9月の土曜日の計22時間※(本学の学生2人、八尾翠翔高校の生徒4人)※残りの8時間は、(1)の夏季講習の教育支援
- 大学の保育コースに進学する生徒の個別ピアノ指導
- 吹奏楽部支援
- 8月および2学期中の計30時間(本学の学生2人)
- 吹奏楽部の活動支援



Athlete's View

体などに装着し、臨場感あふれる映像を記録できるカメラを使って、アスリート視点の動画を撮影しました。

大阪教育大学 体育会

TRACK&FIELD 坂田 千奈

さかた ちな

大学院 教育学研究科 健康科学専攻 1回生
種目：棒高跳
第88回日本学生陸上競技対抗選手権大会 8位 入賞

それぞれの 個性が輝く部

中学3年生までテニスをしていましたが、高校で念願の陸上部に。そこで出会った恩師は棒高跳のスペシャリストで、気づけば棒高跳のおもしろさにはまり込んでいました。

棒高跳の魅力は空中のふわっと感。バランスとタイミングがマッチした時最高の跳躍に！「空中は体操競技」ともいわれる特殊な種目だからこその奥深さが詰まっています。

個人競技ですが、共に支え合い日々成長できるチームで、今は、関西インカレ1部残留を目標にトレーニングに励んでいます。個性豊かで魅力溢れる人との繋がりが生まれ、そこから学ぶものはとても大きいものです。怪我の2年間のブランクも、色んな人の支えのおかげで今があると実感します。ついに6年目の大学陸上ラストシーズン。目標は9月の全日本インカレで表彰台に立ち関わってくれている人に恩返しをすることです。

DATA：陸上競技部

1955年創部。部員数85人(2019年5月現在)
第96回関西学生陸上競技対抗選手権大会 1部昇格
第63回全国教育系大学陸上競技大会 男子総合2位
第57回近畿地区国公立大学体育大会陸上競技の部 男女総合優勝



たかはし けん

教育協働学科 スポーツ科学専攻 3回生
剣道部主将
全日本学生剣道選手権大会ベスト32

一味同心 心ひとつに目標へ

母、姉、兄が剣道をしていた影響で5歳から始め今に至ります。対人競技ならではの相手との駆け引きが楽しく生涯続けられる種目だと思っています。

本学の剣道部は実力、学年関係なく高め合う集団で、稽古終わりやオフの日などはご飯に行ったり遊びに行ったりとプライベートでの付き合いも多いです。

男子は関西学生剣道優勝大会ベスト4、全日本学生剣道優勝大会ベスト16、女子は関西学生剣道優勝大会優勝、全日本学生剣道優勝大会入賞が今年の目標。日々の稽古を大切に全員で成長し、周囲の方々や地域にも愛される剣道部をめざしたいです。

主将としては日々どうあるべきか試行錯誤しながらですが、卒業後は教師をめざしているので、部を通じて当たり前のことを当たり前にする、与えられた職務を全うするなど人間面でも向上したいです。

DATA：剣道部

1955年創部。「(強い)競技部」として活動開始
部員数52人(2019年5月現在)
(女子) 全日本女子学生剣道優勝大会ベスト8
(女子) 関西女子学生剣道優勝大会準優勝
(男子) 関西学生剣道優勝大会3位
(男子) 関西学生剣道新人大会準優勝





大阪教育大学

附属学校園ウォッチ

Affiliated School | Osaka Kyoiku University



OSAKA KYOIKU UNIVERSITY'S

TOPICS

01 大阪市と合築施設設置に向けた基本協定を締結

大阪市と、「新・大阪市総合教育センター（仮称）及び連合教職大学院合築施設設置に向けた基本協定」を1月31日（金）に締結し、松井一郎大阪市長と栗林澄夫学長が協定書に署名しました。

大阪市とは、平成30年2月に「子どもの未来を拓く大阪市と大阪教育大学との包括連携協定書」を締結しています。その包括連携のもと、この2年間は元学校長などの学校現場経験者と大学教員が、管理職・現職教員対象の研修プログラム開発や、大阪市の抱える教育課題への対応に取り組んでいます。今回の協定は、この連携体制をさらに発展させ、連合教職大学院及び大阪市教育センターの機能強化を図り、複雑化・多様化する大阪の教育課題に対応すべく、天王寺キャンパス内に大阪市との合築による新たな施設の建設をめざすものです。

松井市長は、「複雑化・多様化する大阪の教育課題に対応するためには、大学はもとより、大学とつながる教育分野に関心のある企業や、カウンセラー、弁護士、アスリートなどの多様な専門職人材、地域やNPO等民間のネットワークなど連携・協力して相乗効果を生みだし、教員の学びを支えていきたい」と意気込みを語りました。栗林学長は、「今回の構想により、教育現場が直面する教育課題の解決と、これからの社会



02 府立高校教職コンソーシアムとの意見交換会を実施

大阪府立高校42校が加盟する「府立高校教職コンソーシアム」と大阪教育大学との意見交換会を、本学天王寺キャンパスで1月10日（金）に開催しました。

同コンソーシアムは、すぐれた資質を備えた時代を担う魅力ある「教員を育てるために」「教員になること」を具体的にイメージできる機会を提供することを目的として結成されたものです。6年目を迎える今回の意見交換会は、同コンソーシアムから46人、本学から23人の計69人が参加しました。

教師を志望する生徒、興味のある生徒に、教師の魅力と大阪教育大学の魅力を伝えるミニオープンキャンパス、キャンパスガイドや、高校生育成プログラム「教師にまつく」、教員の教師力を向上させる「教師塾」などの連携交流事業について報告や、本学の入試改革及び2019年12月に公表した学校推薦型選抜（特別枠）の概要について説明を行った後、意見交換しました。

出席した校長からは「教職コンソーシアムは平成26年末に結成以来、様々な事業を実施してきたが、大学側から教職コンソーシアムに対し意見や要望等があれば遠慮なく言ってほしい」といった声がありました。

本学では、同コンソーシアムとこのような協議の場を定期的に設けることで、連携の強化を図るとともに、社会の要請に応じた事業を推進していく予定です。



03 SDGsに関心を持ち その世界観を理解する授業を実施

連合教職大学院教育実践力コースの授業「カリキュラムデザイン演習」で、ゲーム「2030 SDGs」の体験が行われました。

これは、SDGs「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）」の17目標を達成するために、2030年までの道のりを体験するゲームで、さまざまな価値観や違う目標を持つ人がいる世界で、どのようにSDGsのビジョンを実現していくのかを体感するものです。選択し実行するプロジェクトで世界の状況は刻々と変わり、参加者やチームがそれぞれ行う様々なプロジェクトを実行した結果として2030年の世界が見える化されます。

前半は、半分のチームがミッションを達成したものの、世界の状況を示すパラメーターは、利益を優先したため「経済」以外の「環境」と「社会」は最悪に、持続可能な社会を構築するために、何のためのミッションかなどを考慮直して再度挑戦した後半では、他のチームとの協働的な関係を作るべくグループ間で活発な交渉が行われました。時間とお金を交換や他チームのプロジェクトへの出資のほか、全体のバランスを意識した合同チームのプロジェクトも実施され、2030年の世界は「経済」も進展し、最悪だった「環境」は「努力中」の評価に上昇。「社会」はかたまり改善されて「目標達成の見込み」、かつミッション達成チームも倍増する結果となりました。

講師を務めた一般社団法人インバウンド・ダイバーシティ協会代表理事で、このゲームの公認ファシリテーターである今田大介氏、「SDGsの本質は、世界がつながっていることと自分が起点であること。私たち自身が、世界にインパクトを与える存在。世界が示す指標を見える化し、共有することで一人ひとりの行動が変わる。SDGsはそれを示している」と語りました。



04 ベトナムの演奏家と交流 第63回定期演奏会

教育協働学科芸術表現専攻音楽表現コースおよび教養学科芸術専攻音楽コース学生らによる第63回定期演奏会をザ・シンフォニーホールで開催しました。今回は日越国際交流プロジェクトとして、ベトナム国立音楽院団音楽監督首席指揮者の本名徹次氏を指揮に迎え、ベトナム国立音楽院のグエン・ティエン・ミン教授と音楽院生2人が演奏に参加しました。

コンサートは、ワーグナー作曲「楽劇『ニルンベルクのマイスタージンガー』第一幕への前奏曲」で華々しく開幕。続いて本コンサートのために書かれた、松本祐樹作曲「櫻を打つ」（トロンボーンとオーケストラのための）が演奏され、東京音楽大学客員教授の呉信一氏が、美しく力強いトロンボーンの色を響かせました。R・シュトラウス作曲「交響詩『英雄の生涯』作品40」では、ミン教授がコンサートマスターを務め、華麗なバイオリン独奏を披露しました。

芸術表現講座の中務晴之教授は、「本名先生の指揮の元、学生たちとゲストが一体となり、レベルの高い演奏ができました。特にミン教授の演奏と指導は、学生たちにとって大変刺激になりました。さらに、本学に在籍しているベトナムからの留学生との交流会も開催しました。今回の事業は日越友好、そして教育的な面からも非常に有意義だったと思います」と総括しました。



附属池田中の生徒がボランティア・スピリットアワードで受賞



ボランティア活動に取り組む中学生・高校生を称える「第23回 ボランティア・スピリット・アワード」（主催：プルデンシャル生命、ジブラルタ生命、PGF 生命、日本教育新聞社）において、本学附属池田中学校3年生の5人による2つのグループがそれぞれ受賞しました。

全国21,116人の中高生のボランティア活動内容をまとめた1,823通の応募の中から各賞の授賞が行われた今回、木村峻大さんと石黒海智さんは、全国40組のブロック賞の1つとしてブロック賞（関西地区代表）および奨励賞を受賞。また、高橋舞衣さん、武田莉奈さん、田村碧さんはコミュニティ賞（関西地区）を受賞しました。

木村さんと石黒さんは、全国表彰式にも招待をうけ、席上で行ったプレゼンテーションにより40組の中から8組のみが受賞する奨励賞に輝きました。2人はこれまで、生徒会役員として、1年間資源物の回収活動や、北海道胆振東部地震・赤い羽根募金への募金活動のほか、附属池田中が認証を受けているセーフティプロモーションスクールの活動の一環として、生徒会が自主的に行っている救命救急講習などの安全教育

に取り組んできました。このほか、修学旅行で訪れた長崎・五島列島で得た学びから、「命の大切さ」をテーマに近隣の小学校に出向いて語る活動も行いました。今回、2人は附属池田中が認定をめざしている国際バカロレア（IB）のカリキュラムの1つであるコミュニティプロジェクト（※）の活動の中でこれらの取組みについてまとめたものを応募し、受賞に至りました。

木村さんは、全国表彰式の3日間を経て、「これからもこの思いを持ち、『1人でも多くの笑顔』をめざして活動の輪を広げていきたいです」と決意を新たに、石黒さんは、「この貴重な経験を生かし、これからも自分で考え、まずは身近な人からそしていずれは多くの人に理解してもらえるような多分野における活動を行ってきたいと思います」と受賞の喜びを語りました。

（※）中学校3年間の学びで得た知識やスキルを活用し、中学生の視点と立場で、地域に存在する課題を自ら発見し、2～3人の小グループでその解決に向けて関係する外部機関などと協働的・継続的に活動するもの。



附属平野小が「未来そうぞう科」の一環として校庭キャンプを実施

本学附属平野小学校が、文部科学省研究開発学校として開発している新教科「未来そうぞう科」の取組みの一環として、6年生を対象に校庭キャンプを実施しました。

附属平野小では、今春、未来そうぞう科のA領域「LIFE」において、和歌山県有田市の地ノ島を「無人島プロジェクト」として開拓している田中崇丈氏をゲストティーチャーに、火起こしや空き缶活用体験を行いました。今回の校庭キャンプは、この体験後に児童らから寄せられた、「自然を満喫してみたい」「無人島のように、あるもので過ごす体験してみたい」「実際に自分たちの力で校庭に一泊できるか試してみたい」などの感想や、「学校で校庭キャンプをしてみることで、いざ災害が起こった時にもこの経験が役立つのではないか」という教員からの意見などをきっかけに実施したものです。

当日は、保護者の方々の協力のもと、児童らは、火起こし器やファイヤースターターを使って一から起こした火とスチール缶で炊飯したり、スチール缶のふたをピーラー代わりに使って野菜の皮をむいてカレーを作ったりするなど自分たちで計画した作業を実行しました。

岩崎千佳主幹教諭は、「今回の校庭キャンプで体験したことは、普段の便利な生活と違い、試行錯誤を繰り返して、友達と協力してようやく達成できるというものばかりでした。ひとりで考えたり、ひとと一緒に考えたりしながら、最後までやりぬいて初めてご飯を食べられ、寒い中でも眠ることができるという、貴重な体験をする機会となりました。この学びが今後に生きることを願います」と語りました。





表紙作品:「兆し」(部分)

芸術表現専攻美術表現コース/芸術専攻美術コース/芸術文化専攻美術研究コース 絵画ゼミ共同作品
油彩/アクリル/パステル/オイルバー/キャンバス/パネル 1900mm×3075mm 2019年

作者:井上七海、兼元朋実、河原明日菜、森本麻佑、山田彩乃、米田湧泉、
要南帆、斎藤真凜、森野真如、下浦萌香、福島愛

公式アプリケーション Android・iOS スマートフォン対応アプリ

大教大NAVI
大阪教育大学入試ナビゲーター

天遊の
動画も
見れる

取材時のオフショットや、紙面では伝えきれないイキイキとした学生・熱意のこもった教授などのナマの声を動画で配信!
〈詳しい使い方はホームページをご参照ください〉

App Store・Google Playから検索。



大教大



天遊 特別号 (vol.50) 2020年3月発行

企画・編集・発行／
国立大学法人大阪教育大学広報室
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1
TEL.072-978-3344 FAX.072-978-3225
E-mail kouhou@bur.osaka-kyoiku.ac.jp
<https://osaka-kyoiku.ac.jp>

